

太田 ゆかりさん

Yukari Ota

StudioGOO企画で何度も踊っていただいているダンサー、振付家の太田ゆかりさん。彼女の主催する TERRIOTORHTHM では音楽家とのコラボレーションを数多く行なっています。所謂劇場でなく音楽専門のコンサートホールで上演することからも、深いこだわりが感じられます。この秋、太田さんはヴァイオリニストがもつともアドレナリンがでると言われる難曲、バッハの無伴奏ヴァイオリンソナタ^(※1)に挑みます。その意気込みと、太田さんのダンスの魅力を探るべくインタビューをさせていただきます。(インタビュー：StudioGOO 吉福 敦子)

呼吸の醍醐味

—太田さんはずっと音楽家とのコラボレーション、ライブ演奏にこだわって活動していらっしゃいます。それはどのような思いからなのでしょうか。

太田 (以下、太) 呼吸でしょうか。演奏家が楽器を演奏する時の呼吸を感じられるのが面白いのです。昨年の「Trace」という作品は、ソプラノ歌手とヴァイオリンとダンスの共演でした。歌は、まさに呼吸。というのを強く感じました。ダンスもあらためて呼吸だと思いました。歌とダンスを合わせるの、呼吸を合わせるということになります。もちろん毎回呼吸が変化するので、全く同じ様には歌えませんから、それが難しいけれど、やりがいもありました。

今回のヴァイオリンの橋本さん^(※2)の演奏も同様です。



楽器演奏も呼吸です。呼吸によって変化します。私と一緒に音が出てきたり、彼も私の呼吸を感じてくれてそれが音になるんです。

—ライブならではの醍醐味ですね。

太 CDだと毎回完全に同じ演奏で踊ることができるので、ある意味安心感がありますが、生の呼吸が感じられないのが淋しいです。

—そして橋本さんとだからできることもあるんですね。

太 橋本さんには、私が独立して初めて企画した公演にご出演頂きました。それがキッカケとなり数回共演させて頂いています。尊敬する大好きな演奏家です。飾らずとも自然体の中に音楽への情熱が演奏に現れていて…。この芸術的感性が自分のダンスに対する感性と共通していると思っています。

五感を刺激する振動のようなダンスと音楽

—太田さんのダンスは音楽と相まって、お客様をも巻き込んでスペース全体に広がり、強烈な「圧」が押し寄せて来るように感じる瞬間があります。圧倒的なかたまりがうわーっとやってくる感じです。

太 かたまり？はははは (笑)

—単にダンスを「観る」、音楽を「聴く」ということでなく、肌で「体験」する印象です。

太 「五感で感じる」ということですね。観るだけでない、聴くだけじゃない。音楽ってすごい振動でしょ。ダンスも観ていてそうした振動がお客様に伝わると思います。そこを感じて欲しいです。あまり観方を難しく考えるのでなく、感覚的な部分で刺激したいし、刺激されたいと。そんなことができますと思います。

—太田さんがそうしたダンスを創り出すという意味では、ライブ演奏の方が力を発揮しやすいのかもしれないですね。

太 ヴァイオリニストがバッハでアドレナリンがでるとありましたが、私もバッハの生演奏があると俄然テンションが上がって、何かいつもと違う感覚が出てくるというのは

*1 無伴奏ヴァイオリンソナタとはヴァイオリンソロ演奏曲のこと。通常のヴァイオリンソナタはピアノとの二重奏。今回の上演は、ダンスソロとヴァイオリンソロのいわば1対1の「対決」というわけです。

*2 橋本洋 (はしもとひろし) ヴァイオリニスト <http://hiro-vn.com>

太田 ゆかり

幼少時よりダンスを学ぶ。1993～96年渡仏。99年 Dance Theatre LUDENS 設立メンバーとなりダンサーに加え、演出・振付補佐を勤め、12年間の全作品・ツアーに参加。現在はフリーとなり「TERRIOTORHYTHM」をはじめ、「Crossing」「Frame」「Trace」など、様々なジャンルの音楽家とのコラボレーション作品を演出振付。2011年ジェローム・ベル演出「The show must go on」に出演など、舞台活動の場を広げている。またダンス講師としてセッションハウス、東京国際ダンスワークショップなど、指導の場も広く、定評がある。<http://yukari-ota.jimdo.com>

あります。

クラシックを身近に感じて…

—太田さんはクラシック音楽にとっても詳しいですが、何か楽器を演奏していたことがあるのですか？

太 ピアノをやっていたのですがチョー下手でした。バイエルもなかなか進まなくて、先生に「ゆかりちゃん才能ないね」って言われたんです（笑）。

—ひどい（笑）

太 小学生の時にバレエをやっていたので、母がいろいろバレエ音楽のレコードを買ってくれて、お姉ちゃんとふざけていつもそのレコードをかけながらかつてバレエごっこをしていました。くるみとか白鳥とか。だから昔からクラシックには馴染みがあり好きでした。おかしいですよね。バレエごっこなんて（笑）。

またフランスに行った時に同じアパートに日本人のピアニストが住んでいて、彼女と仲良くなって、いろいろなコンサートに連れていってもらいました。それから自分でもじゃんじゃんコンサートに行ってCDも買いました。むしろはそうした環境がすごくありました。コンサートも安いし、ラジオつければクラシック専門チャンネルがあって「あ、聴き逃さないように」ってメモしたりして。だからクラシック音楽は単純に好きなのです。その中でも特にヴァイオリンの音色が好きです。

欧米ですと大きなコンサートホールでも、学生の買える安いチケットがあって、ドレスアップしている大人から、音楽やダンスを学んでいる学生達、ラフに音楽を楽しみに来ている人々など、いろいろな人が聴きにきていました。垣根がないんです。

「葛藤」と向き合って

太 今回イザイを初めて使うんですが、私は昔からイザイのヴァイオリンソナタがとて好きで、あまりにも好きで使えなかったんです。実は本番前にイヤホンでいつもイザイを聴いているんです。私の中ですごく思い入れがあるし、イザイの曲を聴くととにかくワクワクして、それこそアドレナリンが出てくるんです。

そこで今回、作品の中に取り込むのもう一度きちんと楽曲を調べてみました。もちろんバッハからの影響が大きいのですが、それと同じくらいに、グレゴリオ聖歌のレクイエムの「怒りの日」の影響が大きく、ベースになっていたことがわかりました。

—「怒りの日」は聖書の最後の審判の日のことですね

太 そうです。でも私はこれを聴いてすごくワクワクして、どちらかという喜びの感情が沸いてきました。今回

はイザイのソナタ2番を使うのですが、その中の第一楽章は「obsession」というんです。強迫観念とか妄執、執着という意味です。イザイはバッハの偉大さから逃れられないみたいなの。そして、その「怒りの日」がソナタ2番全体のベースメロディになっているんです。生と死とか執着とかストラグルな脅迫観念とか。イザイが作曲家としてものごく葛藤している曲なんです。その葛藤を聴いてワクワクしていたんだって…。その中に私のダンスに対する葛藤があるのかなと思ったのです。暗い曲です。だけどその「死」の暗さの中には「生」の喜びがある。死ぬことはキリスト教では怖いことではなくて、私はキリスト教ではないですが、何かそういうものを今回感じました。そして、先日のメモ書きをみたら^(**注3)すごくたくさん「葛藤」と書いてあって、あ～、私のダンスって葛藤なのかって（笑）。

2楽章は「憂鬱」、三楽章は「影達の踊り」、最後は「復習の女神たち」。すごいアタックなの。でもそのアタックの曲を聴いて私は…燃えたがる（笑）。何か内からの情熱が出てきていたのです。そこで「あ、そうなのかも私」と気づきました。ダンスに向っている姿勢というのが、「執着」だったり、生きていく上での「葛藤」だったり。そうしたものに、今一度向き合っています。

葛藤から次のフェーズへ

もうひとつ調べたら、ある有名なヴァイオリニストが一時、ヴァイオリンがまったく弾けなくなった時期があったそうです。しかしイザイの無伴奏で救われたというのです。偉大なすばらしいものを残している作曲家でもこんなに葛藤していて、何もかもうまくいっているばかりじゃないんだ、と思い安心したと。それを読んで、「は～、そういうことか」と思いました。

今回、取って今、この曲を選んだということ自分で確認しました。これがソロに向き合う時に、自分が一番大事にしていることで、無意識にたどり着くところなのなのだと。でもこれは経過であって、また次にたどり着くところあるのだらうなと思います。

(2016年10月25日 StudioGOOにて)

*3 2016年10月2日「対話型鑑賞でダンスを観る会」@StudioGOO。あまりダンスを観たことのない一般の方に太田さんのダンスの観ていただき、感想を話していただいた時のメモのこと。

太田ゆかり TERRITORHYTHM 公演
「SONATA」 Dance 太田ゆかり× Violin 橋本洋
2016年11月10日(木) 15:00 / 19:00
会場：近江楽堂
お問合わせ：share11project@gmail.com

